

ば、海中の潮水其雲に乘じ逆卷のぼり、黒雲を又くはしく見れば、龍の形見ゆることなり、尾頭なごもたしかに見て、登潮は瀧の逆に懸るが如し、又岩瀬と云所、宮崎といふ所まで、十餘里の間に、竟りて、黒龍登れるを見しと云、又鐵脚道人退冥の手代、越後の名立の沖を船にて通りし時、海底に大龍の蟠れるを見しといふ、蟠龍を見る事は、此手代に限らず、彼海底には折々ある事となり、是等は皆慥なる物語なりき。

〔塵塚談上〕不忍池より天明年間龍卷ありけり、佐渡越後越中の海中には、夏の日龍騰る事度々有と、其節は虚空より黒雲下り來れば、海中の潮水瀧を逆に掛しごとく逆卷のぼり、黒雲中に入る、其雲の中に龍の形の如きもの見ゆると傳聞り、其如く不忍池より黒雲逆卷のぼり龍騰りしと見へ、近邊家屋を損し、火の見櫓など倒せしなり、その次第を聞に、北海にて龍騰るの形勢に、少しも替らず同様なり、是をもて見れば、小しき池底にも龍蟄伏し、池水時氣に乗じて發達し、上よりは應じて雲下り、上下相感動し龍昇るものなるべし。

〔甲子夜話入〕先年龍マキトテ暴風雨アリシトキ、諸船コノ難ニ遭モノ多シ、或老侯家根舟ニテ大川ニ遊居シガ、白鬚祠ノ邊トカ此風ニ遭タリ、川水スサマジク卷カヘリ、其舟ヲ空中ニマキ揚グルコト一丈餘ニヤアリケント云、其時舟中ニ侯ノ妾モアリシガ、心カシコキ者ニテ、ワガ腰帶ヲ解キ、侯ヲ舟ノ柱ニ結ツケタリ、ヤガテ舟ハ一ト落シニ、川中ニ墜タルニ侯ハ何事モナカリシガ、髮ノ元結切レタリト云、同舟ノ人ニ溺者モアリト聞ケリ。

〔雲萍雜志二〕つむじといふ風は、春のころは風地を吹をもて、土埃を吹き卷きぬ、長閑なる日などに、ふと風いで、渦を卷あぐる也、辻風なるべし、また西國方に風鎌といふものありて、人の肌へをそがる、なり、そぐ時に傷むことなく、玄ばらくして破血して、その傷堪がたし、このことをふせぐには、古き曆をふところにして居るときは、そのうれひなしと、ところの者は申侍りぬ。